

カポエイラにおける理念「マリーシア」と身体技法

細谷 洋子

The Philosophy “Malícia” and Body Technique in Capoeira

Yoko HOSOTANI

ABSTRACT

In this research, I will examine what kind of technique is embodied in Capoeira's practice place, the philosophy “malícia” emphasized in Brazilian fighting game capoeira. The purpose of this research is to clarify the details of a game with “malícia” based on a series of body techniques in the actual capoeira game played.

As a result, in the 14 games targeted this time, it is understood that “development of technique” is composed by a combination of 4 patterns “take back,” “attack,” “change direction” and “wait.” In Capoeira's game, it is necessary to select various movements flexibility and immediately other than “technique” in order to bargaining. It thought that existing “technique” functions as “technique with malícia” by accompanying three movements that generate bargaining in particular.

KEYWORDS : Capoeira, body technique, malícia

1. はじめに

(1) 目的と背景

本研究はスポーツにおける技の発生と傾向を分析するスポーツ技術研究として位置づけられる。そしてあらゆるスポーツに共通する普遍の見解を見出すというよりは、むしろ特定の種目・身体文化における固有の特性に関心を寄せている。

競技スポーツでは勝敗が明確化されるため、勝利をおさめることが最終目的とされる。しかし、伝統スポーツの類では必ずしもそのような価値体系が基準になるとは限らない。本研究では、そうした地域文化的な価値観「マリーシア malícia」に基づいて実践されるブラジル伝統格闘技カポエイラを対象とする。

『「マリーシア」の理解なくして、カポエイラの理解は得られない』とアバダ・カポエイラの創始者メストリ・カミーザ¹⁾が述べているように、カポエイラ実践者間で「マリーシア」は重要な理念とみなされており、ブラジルの身体文化であるカポエイラ

を実践する際にその理解が不可欠である。「マリーシア」を理解しようとすることで、カポエイラ独自の世界観の奥行きに気づき、地域文化的な格闘技(身体文化)としての理解が深まると考えられる。さらには、地域文化の縮図ともいえる身体文化の礎をなす世界観を理解することによって、当該地域の理解も必然的に促されよう。

また、「マリーシア」は、サッカーの戦術として有名な理念という印象が日本では強い傾向にある(戸塚, 2009)。さらに「マリーシア」に類似した言葉の「ジェイチーニョ jeitinho」を扱った新書でも「マリーシア」が紹介されており(武田, 2014)、サッカー競技にも活かされる文化的理念として「マリーシア」は認識されつつある。

「スポーツをすることで人間は、ルールにより拘束された特定の運動の形態やそのスポーツに込められた特定の価値観等を学習していくことになる。他方でそれは、人間の動きを制約していくという両義的な顔を備えている。」(岡出, 2015 : 26)といわれるように、カポエイラにおいて、「マリーシア」と

いう理念によって実践者はカポエイラに特定の価値観を学習することになる。そして、同時に「マリーシア」が実践者の動き方を方向付ける。「マリーシア」の社会的配置に基づく理解は他の機会に譲るとして、本稿では「マリーシア」がカポエイラではどのような技術として発生しているのかに着目する。

したがって、本研究では、ブラジル格闘技カポエイラにおいて重視される理念「マリーシア」が、カポエイラの実践の場において、どのような技術として具現化されているのかを検証する。実際におこなわれたカポエイラのゲームにおける一連の身体技法を基にして、「マリーシア」のあるゲームの内実を明らかにすることを本研究の目的とする。

(2) カポエイラの概要

今から350年ほど前に、カポエイラはのちのブラジルとなる土地で、アフリカ文化の影響を受けて創出された。当時は、もっぱらアフリカ系奴隷の娯楽や身体訓練として実践されていた。しかし、1800年代になると、カポエイラは奴隷の身分ではない黒人やクリオウロ（混血者）たちによっても娯楽的に興じられるようになった（コンドゥル、2010：21-33）。1888年の奴隷制廃止の後にはカポエイラの実践者層が拡大し、エリートらの富裕層においても健康維持促進や護身術としてカポエイラが実践されるようになった（ソアレズ、2010：45-52）。そして1930年代にはブラジル北東部のバイア州において、ドラッグや犯罪行為等の社会的「悪」から遠ざけることを目的とした「社会救済」²⁾として、カポエイラ師範らと行政の協働によってカポエイラの体系化が実現された。また時を同じくして、カポエイラの特徴である連続的な身体技法において、始まりと終わりが明確なひとまとまりの動きとしての「技」³⁾が意識され、それらの指導法の開発や実践形式（楽器の種類・数、場の大きさ等）が制定され、カポエイラの競技化が進められた。

現在、ブラジル社会では国民統合の文脈において人種差別の縮小が目指されている。そうしたなか、教育による善良な市民の育成のために、カポエイラを含むアフロ・ブラジル文化の各実践が2003年か

ら学校教育へ導入され始めた⁴⁾。さらに2006年にはインディオ文化も同様に学校教育へ導入が開始され、多人種多民族国家・社会の多様性を学ぶ機会の拡充が実現されつつある（細谷、2015：30-32）。また、カポエイラについては、その運動能力開発や健康面の効果のみならず、人間教育としての機能も着目されている。実践者らには、カポエイラを通じた望ましい倫理規範の醸成が期待される。そうした倫理規範は1990年以降のカポエイラの競技化においても、競技規則に明文化され、競技者の遵守すべき心得やルールとして掲げられている（細谷、2015：79）。こうして、かつてのマイノリティ文化カポエイラは、実践者層の拡大を伴いながら身体文化としての価値が多面的に見いだされ、現代ブラジルにおける国民統合の一助として機能しているのである。

また、カポエイラの実践形式は、その場にいる人たちがホーダ *roda* と呼ばれる輪をつくり、輪の中で二人組のゲーム（「jogo ジョゴ」：遊び、闘い、試合という意味）がおこなわれる（写真1参照）。ホーダは、楽器奏者、歌い手、手拍子と合唱をする人々で構成される。楽器の種類は、弦楽器「ピリンバウ *berimbau*」と打楽器「アタバキ *atabaque*」「パンデイロ *pandeiro*」「アゴゴ *agogô*」が主に用いられる。ピリンバウは瓢箪の大きさによって、大中小の3種類あり、最も大きい「グンガ *gunga*」をひく人が、ホーダの指揮をとる。グンガが奏でるテンポに合わせた演奏と合唱、手拍子によるリズムを常に意識しながら、ジョゴはおこなわれる。ジョゴには制限時間等はなく、基本的にはホーダを囲む人のすべてがジョゴに参加できる。ジョゴをしている二人に、次のプレイヤーが割り込んでそのジョゴに入り、次のジョゴが途切れることなく続けられる。ジョゴは30秒ほどで終わることもあれば、5分以上かかることもある。ホーダを囲む人々は、常に手拍子と合唱をし、円隊形を整え、ホーダの一体感を高めるように協力してホーダに参加する。ホーダは長いときで2時間近く続くこともあり、参加者はジョゴをし、各種楽器演奏を交代し、合唱し、手拍子をするなど、横断的かつランダムに様々な役割を担う。参加者はホーダが常に活気のある状態になるように、グンガ奏者

の指示に注意を払いながら取り組む。このように、カポエイラのホーダでは、参加者は時にプレイヤーとなり、時に鑑賞者あるいは演奏者となり、その場の流れにあった臨機応変な対応が求められる。



【写真1】カポエイラのホーダ(集会形式のゲーム)の様子
(2016年3月26日ポルトガル競技大会にて、細谷撮影)

2. 「マリーシア」の語源と概念

(1) 「マリーシア」の語源と現代的意味

「マリーシア malícia」の意味は、ポルトガル語辞典 online によると「悪だくみあるいは悪意のこと」⁵⁾とある。一方、significados.com.br によると、「マリーシアは悪意のある行為を働くための傾向や思考を意味するラテン語の malitia を語源とする女性名詞である」⁶⁾という。ラテン語の malitia は、「悪いこと、いかさまの賭け勝負、ごまかし、悪事、詐欺」を意味する⁷⁾。総じて、「マリーシア」は「悪事・ごまかし」の意味から派生し、実際に悪事を働く前の考え方そのものやそうした考えを抱く思考や姿勢のことをも含意する言葉のようである。しかし、先述のように、現在、カポエイラ実践者間では「抜け目ない・機転が利く・知恵がある」という肯定的意味で用いられることが多い。単に悪だくみの意味だった「マリーシア」は実践過程で新たな意味が付帯されたと推察される。

(2) 「マリーシア」の概念と下位概念

2000年頃までは、「マリーシア」は日本で紹介される際に「ずる賢さ」と訳されるきらいがあった⁸⁾。日本文化的には「ずる賢さ」という言葉に対して肯

定的な印象を持つ人は少ない。むしろ否定的な意味で用いられることがほとんどである。一方、ブラジルにおいて「マリーシア」は、カポエイラ実践者間で「抜け目ない・機転が利く・知恵がある」という肯定的な意味合いで共有される概念である。このように、訳語によって同じ言葉でも心証に差異が生じてくる。

論者によって異なるが、SEZEFRED によると、「マリーシア」の下位概念として「マウダージ maldade 残酷さ、悪事」「ファウシダージ falsidade 虚偽」「トライサオン traição 反逆」が従属しているという⁹⁾。また、「マウ mal 悪い」という意味を帯びている「マウー mal-」で始まる語、「マランドロ malandro ごろつき、ずる賢い人、抜け目のない人」「マランドラージェン malandragem 悪事、極道」「マリシオーゾ malicioso 悪意の、抜け目のない、狡猾な」¹⁰⁾等も、マリーシアの同義語として扱われることもあるようである¹¹⁾。

(3) 哲学としての「マリーシア」

「マリーシア」を「悪だくみや悪意」として、それがカポエイラのジョゴにおける駆け引きを実現するための思考や姿勢であると解釈すれば、一見「マリーシア」は、他の競技スポーツでも共通する巧みな駆け引きにも通じる考え方と捉えられなくはない。「相手の行為や状況の展開を先取りして即座に適切な戦術行動を展開できる能力」を意味する「戦術力」(朝岡, 2015: 471)として「マリーシア」の一側面を説明できるかもしれない。しかし、これまでのメストリ¹²⁾らの言説や先行研究から見ると、「マリーシア」は戦術や先の辞書における意味だけにとどまらない哲学的な意味¹³⁾が与えられている。こうした「マリーシア」は、カポエイラのジョゴにおける多様な駆け引きを試みること(実施できなくてもしようとする姿勢)を通して身体化される技術であり、それを支える理念である。そして、「マリーシア」は習得すべき技術や教義として明確な輪郭は定められておらず、学ぶ人自身の認識に委ねられる。

3. 「マリーシア」の機能

(1) カポエイラの「ジョゴ」の性質

カポエイラは近代化され、競技的性格が色濃くなったものの、すべての流派に共通する公式競技規則（勝敗規定含む）はいまだ明文化されていない。現在でもカポエイラのゲームを指すジョゴ（あそび、闘い、試合という意味）では、勝敗の明確化が最たる目的ではなく、創造性の発揮に主眼が置かれる傾向にある。互いに技術レベルを競う一面もあるが、結果的に勝敗はつけないため、相手は完全な敵対関係にあるわけではない。むしろ、ジョゴの即興的な展開における創造性が目指されるため、相手の動きによって自分の動きが引き出されることもあり、ジョゴの相手とは共同的な関係といえる。

また、カポエイラの師範らが目指す「よいジョゴ」の指導における言葉かけによると、カポエイラのジョゴでは、様々な動きや展開をすることによって「厚みのあるジョゴ」をすること、文脈に応じて「創造性」を発揮しながら芸術性を高めること、相手のアクション（質問）に対して応える（応答）という「質問と応答」の反復が求められている（細谷、2015：69-71）。「厚みのあるジョゴ」とは、カポエイラにおける身体技法の豊富なバリエーションや駆け引きを活かしたジョゴをすることを意味する。例えば、一回あたり30~70秒ほどのジョゴにおいて、同じ蹴りの反復ではなく、異なる種類の蹴りを用いることが好まれる。また、駆け引きが単調にならないように配慮する必要もある。これは蹴りに限らず、移動の動きやよけにおいても同様である。そうしたジョゴには、一般的な「強さ、速さ、高さ」を競う競技スポーツとは一線を画した、創造性によって生み出されるカポエイラ独自の面白さが保障される¹⁴⁾。したがって、カポエイラのジョゴは、勝敗は目指さず、相手と共同的に創造性の発揮が目指される「共創的ゲーム」であるといえる。

(2) 相対的判断基準としての「マリーシア」

こうしたカポエイラのジョゴには実践者に共有された判断基準が存在する。例えば、「マリーシア」

である。カポエイラのジョゴの駆け引きや身体技法では「マリーシア」が十分に生かされている（以下『マリーシア』のあるジョゴと呼ぶ）かどうかが重視される。その際、抜け目なく知恵を生かした駆け引きや振る舞いの有無が判断基準になる。

さらに、「厚みのあるジョゴ」を実現するためには、機転を利かせて様々な動きや駆け引きを繰り出す必要がある。また、相手の裏をかいた戦術的な展開も求められてくる。このように「マリーシア」の有無が「厚みのあるジョゴ」を生み出す機軸として機能しており、良いジョゴの基準をなしているのである。

しかし、一般的にカポエイラのジョゴにおけるこうした駆け引きや振る舞いは、ジョゴの流れの文脈に応じて適した対応は異なってくる。そのため、望ましい駆け引きや振る舞いは、ジョゴをしている2人と、楽器演奏者を含む輪を囲む人々がそれぞれに有する経験を基盤に、その場で共有される基準が、暗黙の裡に毎回創られていると言える。そのため、各ジョゴによって全く異なる基準が採用される可能性も生じてくる。

つまり、マリーシアは、カポエイラにおいて相手と共同的に創造性の発揮が目指される「共創的ゲーム」で判断基準として機能する。そして、その基準は絶対ではなく、場にいる人々による暗黙裡の交渉によってその都度見いだされる相対的な判断基準といえる。

4. カポエイラにおける基本的身体技法

(1) カポエイラの技

20世紀初頭になるまで、カポエイラは口述伝承のためルールは成文化されていなかった。1928年にリオデジャネイロで出版されたZuma（本名 Annibal Burlamaqui）による『国民的体操法：カポエイラジェン』がカポエイラにおけるルールを明文化した初の書籍であった（細谷、2015：75）。現在、カポエイラの各流派の主催するカポエイラの競技大会では競技規則文が設けられている場合もあるが、カポエイラ実践上のすべてのルールが成文化されているわけではない。カポエイラは口述伝承で、実践者同士で

共有される暗黙の了解の上で成り立つものだったため、現在もそうした性質が受け継がれている。そこで、現在にも通じるカポエイラにおける暗黙のルールを考えてみると、必ず「カポエイラの動きをする」ことがその一つとして挙げられる。カポエイラのゲームは、カポエイラの身体技法でおこなうことが求められる。他競技と類似した動きをカポエイラのゲームでおこなう際にも、カポエイラ特有のステップから技に入り、直後にカポエイラの構えで動きをおさめることで一連の「カポエイラの技」としてみなされる。つまり、「カポエイラの技」としてみなされるには、カポエイラらしい動きの流れを崩さない流動性が重視される。以下にカポエイラの身体技法を紹介する。

(2) 基本ステップと構え

カポエイラの初学者がまず習う身体技法は「ジンガ *ginga*」である。ジンガは、ポルトガル語で「よちよち歩き、千鳥足」という意味で、肩幅より広めに開いて膝を軽く曲げた状態で、右脚を引く、左脚を引く、これを交互に繰り返す。筋力トレーニングのランジ（主に大腿四頭筋と大臀筋に刺激を与える動作）で、片脚を前に踏み出すのではなく後ろに引く動きと表現した方が想像しやすいかもしれない。

このジンガは、カポエイラのジョゴをおこなう際に踏み続けるステップのようなものである。左右にリズムカルに揺れ続けるため、相手にリズムを読まれないように、動き方やタイミングを工夫する必要がある。その一方で、リズムカルなジンガの動きの過程が、蹴りの準備動作を兼ねる場合もあるため、攻撃に転じやすい、という利点もある。したがって、リズムカルに動きながらもアレンジした動きを含めて動くことで相手に読まれにくく攻撃に転じることができる。ある師範は、このジンガは指紋のようなもので、誰一人として同じ動き方をすることはない、と言っており、まさにジンガは十人十色である。

「カデイラ *cadeira*」は、両足を肩幅よりも広めに開いて、膝とつま先を正面寄りに向けた状態で90度近くまで屈曲する。両腕は肘を曲げ、顎の前で腕を交差させるような位置に据え、顔や頭部、喉などの

広範囲を防御する。腕は適宜防御や攻撃に転じることができるよう常時動かす。この構えの姿勢は、単に蹴り技の構えとしてだけでなく、対峙した相手との距離を調整し、攻撃のタイミングをはかる等、間合いを整える際にも有効な動きである。

(3) 攻撃（蹴り、足払い、頭突き、倒し技）

カポエイラにおける攻撃技は、蹴りや頭突き、倒し技等である。

蹴りは、体幹における90度以上の回転を伴わずに蹴る場合（以下「直線蹴り」とする）と、90度～360度の軸足・体幹の回転を伴う蹴り（以下「回転蹴り」とする）がある。直線蹴りは、マルテロ *martelo*、ベンサオン *benção*、メイア・ルア・ジ・フレンチ *meia lua de frente*、ガンショ *gancho*、ピザオン *pisão*、ポンテイラ *ponteira* 等の6つが代表的である。回転蹴りは、ケシャーダ *quechada*、アマダ *armada*、ピザオン・ホダード *pisão rodado*、コンパソ *compaço*、ケシャーダ・コン・マルテロ *quechada com martelo*、アマダ・コン・マルテロ *armada com martelo* 等の6つが主な蹴りとなる。これらの蹴りは、単独で蹴ることもあれば、連続的に蹴ることもある。また、直線蹴りや回転蹴りのそれぞれを二回以上繰り返す場合もあれば、直線蹴りと回転蹴り、回転蹴りと直線蹴りという組み合わせで蹴る場合もある。もちろん3回以上連続することもある。蹴りをおこなう直前の動きには、ジンガあるいは後述する他の技をおこなう。

頭突きは、他の格闘技では珍しいが、自らの頭を相手のあごやみぞおち、脇腹等をめがけて当てる動きである。両手あるいは片腕で自分の顔を防御しながら、相手に頭突きをする。頭突きをくらくと、相手は体勢を崩し、時には尻もちするほどに倒れこむこともある。

カポエイラは蹴りに代表される足技が中心という印象を持つ人も多いが、相手を倒す技も存在する。足払いは、主に相手の蹴りの軸足に、自身の足をかけ、引くことで、相手の体勢を崩すことを狙う動きである。軸足をタイミングよく抜くことができれば、相手は地面に尻もちや背中をつくこともある。また、

相手の胴体を自身の腕と腿部で挟み、相手を背部に倒す技もある。あるいは相手の蹴りの軸足に対し、柔道の太外刈りの要領で足をかける技がある。こうした倒し技はジョゴの文脈における山場を創る。そして倒し技の後はジョゴが仕切り直されることが多い。倒し技は一般的にジंगाから直接おこなわれるのは稀で、相手の蹴りが終わる頃などを見計らって他の技から連続的におこなわれることが多い。

(4) 防御と移動

カポエイラにおける蹴りをよける動きは流派によって異なるが、しゃがんでよける場合と相手と距離をとってよける場合とがある。ジョゴでは蹴りをよけながら、次の蹴りや技へ展開していく。よける方向も原則として決まっており、ジョゴの流れに応じたよげが必要となる。

移動は両手を地面につく側転のような動きや、側転ほどに足は上げず、足を地面にすって移動する動きがある。蹴りやよけの合間におこなうことで相手との距離を調整し、時には相手の背後に回り込む等して展開していく。また、移動そのものがよけを兼ねる場合もあり、ジョゴの文脈によって移動が多様な機能を果たす。

(5) アクロバット（支持技、跳躍技）

アクロバットは、「フロレイウ floerio」という華やかに見せる動きの一つである。

側転のアレンジ技や、倒立姿勢での回転技、ブリッジを伴う一連の動き、宙返り等がある。ジョゴの始まりやソロ演技、蹴りの合間等に動きの流れを活かしたアクロバットがおこなわれる。宙返り系はロンダートから連続的に後方宙返りがおこなわれることが多いが、蹴りをよけるタイミングで単発の後方宙返りがおこなわれることもある。後方宙返りの種類は1/2ひねり・1回ひねりや伸身等が見受けられる。高度なアクロバットは、必ずしなければならないというわけではない。得意な動きを実践者が適宜ジョゴでおこない、アクロバットによってジョゴの流れや駆け引きが希薄にならないように細心の注意を払うことが望まれる。

5. 身体技法における「マリーシア」

(1) 「技（わざ）の技術」という視点

スポーツの運動技術を階層的に捉えると、「運動技術の概念の最上位には、いわゆる『技』と呼ばれる運動形態が位置づけられる」とされており、それぞれの種目における「目的の最良の達成手段として特定の技（運動）が選ばれている」（佐藤、2015：472）という。これに基づくと、先述のとおり、カポエイラの場合は「マリーシア」のあるジョゴの実現を目的に、ジंगा、カデイラ、蹴り、よけ、移動、アクロバット等の豊富な「技」が選ばれる。さらに、そうした個々の「技」を遂行するために「技術」が存在する。例えば、アウーと呼ばれる側転に類似した「技」では、構え方、手のつきかた、蹴り上げ方、腰の乗せ方、身体の上め、着地の仕方、突き放し方といった多くの「技術」が必要となる。このように、「技」を遂行するための多くの「技術」は「技の技術」といえる。カポエイラのジョゴにおいて実践者は、「技」を連続して動き、駆け引きを生み出すことで、『マリーシア』のあるジョゴ」というさらに上位階層に位置するパフォーマンスとしての広義の「技」を達成する¹⁵⁾。

次項では、分析枠組みとして「技の技術」を用いて、ジョゴで駆け引きが発生した場合の「技」を抽出し、駆け引きの目的に応じた「技」の傾向をみていく。相手の動きに応じて優勢に持ち込もうとする過程で、ジョゴに「マリーシア」を伴う駆け引きが生じる。その過程で先述のジंगाを除く「技」が2つ以上連続しておこなわれた場合の『技』の展開を「マリーシア」のあるジョゴとして捉える。

ただし、次項で分析する際、「マリーシア」のあるジョゴの判断は筆者による。ただし、先述のとおり、「マリーシア」のある事象を認識するかどうかは実践者自身の経験に依存する。そこで、師範らによって採点形式でジョゴが評価される、アバダ・カポエイラ競技大会における上級レベルの実践者（実践歴10年以上かつ上級帯保持者）によるベスト16以上のジョゴを分析対象とする。次項では、客観的によいジョゴとして評価されたジョゴにおける「マ

リーシア」を伴う駆け引きの発生を抽出する。

(2) 『技』の展開』の分類とマリーシア

ジョゴは、楽器演奏のテンポや用いられる身体技法の差異に基づき、種類が分けられる。その中でも特に複雑な駆け引きが生まれやすいベンゲラというゆっくりとしたテンポ¹⁶⁾のジョゴを中心に、計14組分(各組約40秒～約1分、実践歴10年以上の男性

11組、女性3組)を対象とした。これらの動画は、2015年8月19日、8月20日、8月22日にブラジルのリオデジャネイロ州で記録したものである。動画分析の結果は以下の表1の通りである。また、表1から駆け引きを発生させる『技』の展開を抽出し、類似したものをまとめ、さらに『技』の展開の目的に基づき分類した。

【表1】ジョゴから抽出された駆け引き一覧

ジョゴ	0~10秒	11~20秒	21~30秒	31~40秒	41~50秒	51~60秒	61~70秒	段位
1			22コンバノに回り込む 切返してコンバノ蹴返す		背後に入ってピンガチバ	着地時にピンガチバ、57ガシヨ後回り込む		緑
62s					44フィンタコンバノ			緑紫
2			22回り込みマカコに頭突き			アウーに頭突きをする	マカコに頭突きする	緑紫
84s			マカコする			52アウー保持後、頭突きの途中を蹴る	68足抜きマカコ保持後、背中蹴る	緑紫
3						回り込み、蹴りの横に頭突き		緑
70s						51ホレイから蹴りに転じる		緑
4						51アウー時頭突きに膝蹴り		緑紫
86s						アウーに頭突きする		緑
5			ホレイでよけつつアウーの足で背中側へ蹴る					茶
40s		19マテロジャヤオン蹴足をコンバノに変化後回り込みピンガチバ						紫茶
6					コンバノフィンタ、左ホレイ、右アウーとロックガダ、右マテロジャヤオン、ピンガチバ、			紫
50s					41コンバノフィンタ、カベサダ、エントラベンソ、右アウー、左アウーフェシヤビ			紫
7					41ホテラ蹴り足ついてコンバノ、足挟いてデスタバチカ、エントラピンガチバ、			緑
55s					デスタバチカ、ケタジクワトロ、ペンソ、カデラ、回り込む			緑
8		ハステラ途中でホレイで後方へ、左カウカンイエロ、右コンバノ、倒立ケタジヒン開脚、相手のハステラ待ってマゾラ、						紫茶
44s		18フィンタコンバノ、カベサダ、右ハステラ、ホレイ、右ハステラ						茶
9		かぶせてコンバノ、エントラペンソ、アウーとロカダでケタジヒン、カベサダを黒弱び	マカコに対してカベサダ後、カデラ		相手のコンバノにカベサダ後、ケタジクワトロ、カベサダ、カデラ			茶
58s			13コンバノ、アウーで下がって、エントラカデラ、ケタジヒンにカベサダ、足の間をバック転で蹴るし、カベサダ	20マカコと見せて、途中でシヤベウジウワロで、相手のカベサダの背中に両足を乗せ、切り返して蹴ってカデラ	相手のコンバノにカベサダ後、ケタジクワトロ、カベサダ、カデラ			紫茶
10		17ホレイからマカコ、カデラで待って、カベサダから、アウーで回り込む						紫
50s								紫
11			カデラで待つ、カベサダ					紫
45s			22ケタジクワトロで蹴る					緑
12			23ハステラ、その足でコンバノ、ピンガチバに対してジョエリナダ					紫
48s			アウー、カデラ(よけ)、ピンガチバ					緑
13			21マテロジャヤオン途中でガシヨ、回込後カベサダ					緑紫
46s			ホレイ、本ガチバコンバノ					緑
14	8マテロジャヤオン途中でコンバノ、着地前に回り込んでジョエリナダ							紫
48s			ホレイ、ホレイ					紫

※ 表中の文頭にある数字は、一連の「技」を開始した秒数を意味する。

※ 表中の文末にある「/」は、相手からの攻撃の「技」を受けたことを意味する。

※ 表中の□網掛け表示は、ジョゴが終了していることを表す。

(2017年10月、細谷作成)

【表2】「技」の目的による分類

<「技」の展開>		<「技」の目的>
A	回り込んでガンシヨ	裏をとって攻撃
	回り込んで膝蹴り	
	背後に入ってピンガチバ	
B	待って蹴る	待って攻撃
	待ってチゾラ	待って裏をとる
	待ってカベサダ	
	待って相手の頭上を飛び越える	
C	切り返して蹴る(左右入替)	方向を変えて攻撃
D	頭突き後アウーで回り込む	攻撃後裏をとる
	蹴ってピンガチバ	攻撃後攻撃

※ガンシヨは蹴り技、チゾラとピンガチバは倒し技、カベサダは頭突きによる倒し技、アウーは側転のような移動のことである。

(2017年10月、細谷作成)

【表3】4種の『技』の展開

A 裏をとって攻撃	B 待って攻撃	C 方向を変えて攻撃	D 攻撃後攻撃
右蹴りから相手の裏へ入る 	側転の動きから着地せずに姿勢を保つ 	相手の足払いに左足払い 	下から右脚で蹴りにいく 
	左脚着地で右脚で蹴る 	左右の脚を入替える 	途中から相手の背後からの倒し技に切り替える 
右脚を抜いてそのまま 右脚蹴りへ 		左脚着地と同時に 右脚の回転蹴りへ 	相手の腿に足をかけて倒し技へ 

(2015年8月筆者撮影、2017年10月筆者作成)

その結果、表2、表3のように、「A裏をとって攻撃」「B待つて攻撃／待つて裏をとる」「C方向を変えて攻撃」「D攻撃後裏をとる／攻撃後攻撃」の4パターンが抽出された。Bの「待つて」というのは、タイミングをつかむために動きながら狙って待つ場合と、相手に裏をとられ不意に反応する場合の2パターンが見受けられた。後者は意図的に待つているわけではないが、表層に現れる「技」の展開は同様のため、同じ分類としている。

今回対象にしたジョゴでは、「裏をとる」「攻撃」「方向を変える」「待つ」という4パターンの組み合わせによって「『技』の展開」が構成されていることがわかる。身体技法として先述した「技」に該当する「攻撃」以外に抽出された「裏をとる」「方向を変える」「待つ」は、カポエイラの「技」と「技」を接続し、駆け引きをするために必要不可欠な「動きの目的」である。言い換えれば、「技」以外のこうした動きは「技の技術」における「技」の目的として、カポエイラではジョゴの駆け引きの充実に貢献する。

カポエイラのジョゴでは、駆け引きをするために「技」以外のさまざまな動きを、機転を利かせて選択して即時に展開していく必要があり、特に駆け引きを発生させる「裏をとる」「待つ」「方向を変える」の3つの目的が加わることによって、既存の「技」は「マリーシアを伴う技」として機能しうると考えられる。

6. おわりに

こうした「『技』の展開」のパターン化によって見いだされた「動きの目的」を意識することによって、効率的な練習方法の開発へ繋がる可能性もある。しかし、本来個人的な経験によって身体化される「マリーシア」は、そうした画一的な練習方法では十分に習得できない性質のものでもある。「マリーシア」は「『技』の展開」を効果的に高めようとする一種の態度であり、先人の教えのように日常生活において磨かれることもあるだろう。

そうした「マリーシア」の経緯について社会的布

置を踏まえた解釈と併せてみていくことで、「マリーシア」の奥行きと掘がりを照射することができよう。

〈謝辞〉

本研究は、科学研究費補助金(若手研究(B)) (JSPS 科研費 JP15K16477) の助成を受けたものである。

- 1) Abadá-Capoeira は、Associação Brasileira de Apoio e Desenvolvimento da Arte-Capoeiraの頭文字をとったもので「ブラジル・カポエイラ芸術後援促進協会」という意味である。世界55か国以上に支部をもち、会員数は5万人を超える。数あるカポエイラ団体の中で最大規模の団体といわれている。メストリ・カミーザは本名 José Tadeu Carneiro Cardoso。1956年バイア州生まれ。1970年以降のリオデジャネイロにおけるカポエイラ発展を牽引した。
- 2) 社会救済とは、resgate socialの訳で、当時のバイア州で貧困層の子どもたちがドラッグや犯罪行為などの社会的「悪」に手を染めないように、カポエイラの訓練に意識を向けさせる活動を意味し、社会教育的な取り組みの一環を指す。
- 3) ここでいう「技」とは、スポーツにおける「技術」概念に基づく。スポーツにおける「技術」とは、実践の中で発生し、検証されたスポーツの運動経過の最も合目的な形態である(中村他、2015:470)と定義されている。
- 4) 2003年1月に制定された法令10639号により、基礎教育段階においてアフロ・ブラジル文化と歴史の教育が義務化された(細谷、2015:30-36)。
- 5) 訳出は筆者による。原文は、“intenção maldosa ou picante : um olhar cheio de malícia”とある。
- 6) 訳出は筆者による。原文は“Malícia é um substantivo feminino com origem no latim malitia e que significa uma propensão ou tendência para praticar atos de maldade. Agir com malícia muitas vezes significa se comportar com dolo, com astúcia e com o objetivo de enganar ou causar dano em alguém. Uma pessoa que tem uma atitude de malícia muitas vezes é dissimulado, e finge alguns sentimentos para encobrir as suas verdadeiras intenções.”とあり、「幾度ものマリーシアを伴う行動は、悪意を伴う振る舞い、策略を持った振る舞い、他者を騙すあるいは害を与えることを目的とした振る舞いを意味する。幾度ものマリーシアの態度のある人は、その人の真意を偽るためにいくつかの感情を装い、偽装する。」と訳された。
- 7) オンラインの「無料ラテン語辞書」による(2017年

- 9月20日検索)。http://wordbook.asia/%E3%83%A9%E3%83%86%E3%83%B3%E8%AA%9E%E8%BE%9E%E6%9B%B8/search/malitia/
- 8) 2009年に戸塚は、戦術のように目に見えるものではないため定義は難しいと前置きをしながらも、「マリーシアとは、『狡猾さ』だけを指し示す言葉ではない。マリーシアとは、『柔軟性を持った発想力』である。マリーシアとは、『勝つために必要な駆け引き』である。そして、マリーシアはブラジル人特有のメンタリティや価値観ではなく、フットボーラーなら誰もが身につけるべきスキルである。」と記している(2009, 戸塚: 9)。また、2014年に武田は「マリーシア」の訳語として「悪知恵、悪賢さ、狡知」といった否定的な意味と、「知恵、機知、機敏さ、要領の良さ」という肯定的な意味を紹介し、サッカーでは後者で用いられることが多いと述べている(2014, 武田: 62)。このように、近年では国内でもマリーシアが話題に取り上げられ、その概念の多様性が言及されている。
- 9) SEZEFRED DOS PASSOS NETO, Nestor (2014) “Capoeira: a construção da malícia e a filosofia da malandragem, 1800-2010” pos. 551 de 13447. ただし、カポエイラは元より口述伝承のためか、下位概念としての明確な根拠は確認できない。
- 10) 「マウダージ maldade 残酷さ, 悪意」「マウジート maldito 極悪な, 邪悪者」等も mal で始まる言葉として挙げられるが、これらの言葉は比較的否定的な意味合いが強いため、退けられる。
- 11) mal で始まる言葉ではないが、「マンジンガ mandinga 魔術, 魔法」もカポエイラでは多用される。
- 12) メストリ Mestre とは、「師範」を意味する。
- 13) 学問領域としての哲学ではなく、生き方や事物のあり方等を指す。
- 14) スポーツルール研究において、守能によるとスポーツルールの機能として、「法的安定性の確保」「正義の実現」「面白さの保障」を挙げており、三つ目の「面白さの保障」がスポーツルールの最も重要な機能と述べている(守能, 2007: 229)。

- 15) 佐藤が「技術は『目的のための手段』である」というハイデッガーの見解に従い、「その目的をどこに置くかで技術の内容も階層的に変動する」(佐藤, 2015: 472)と述べていることに依拠している。
- 16) 目安として、「Andante 歩くような速さで(♩=63~76)」から、「Moderato モデラート(控えめなスピードで)(♩=76~96)」の中ほど(♩=92くらい)までの速さである。

〈文献一覧〉

- 朝岡正雄(2015)「13. A. スポーツにおける技術・戦術」, 大修館書店, 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則『21世紀スポーツ大事典』, 13. A: 471.
- コンドゥル, ギリエルミ・フラザオン(2010)「2. カポエイラの変貌—カポエイラの歴史をたどって」, ブラジル連邦共和国外務省, 前田和子訳『texts of Brazil カポエイラ』, 2: 21-33.
- 細谷洋子(2015) アフロ・ブラジル文化カポエイラの世界. 明和出版.
- 守能信次(2007) スポーツルールの論理. 大修館書店.
- 岡出美則(2015)「01. C. 2) スポーツ類似概念」, 大修館書店, 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則『21世紀スポーツ大事典』, 01. C. 2): 25-27.
- 佐藤徹(2015)「13. B. スポーツにおける技術」, 大修館書店, 中村敏雄・高橋健夫・寒川恒夫・友添秀則『21世紀スポーツ大事典』, 13. B: 471-472.
- SEZEFRED DOS PASSOS NETO, Nestor (2014) “Capoeira: a construção da malícia e a filosofia da malandragem, 1800-2010” pos. 551 de 13447.
- ソアレス, カルロス・エウジェニオ・リバノ(2010)「5. グアルダ・ネグラ(黒人護衛隊)—政治舞台上に登場したカポエイラ」, ブラジル連邦共和国外務省, 前田和子訳『texts of Brazil カポエイラ』, 5: 45-52.
- 武田千香(2014) ブラジル人の処世術—ジェイチャーニョの秘密—. 平凡社.
- 戸塚啓(2009) マリーシア〈駆け引き〉が日本のサッカーを強くする. 光文社.